

小児急性白血病人の神経学的所見及び心理検査からみた晩期障害

Ⅱ．心理検査からみた晩期障害

(分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究)

赤塚順一、島崎晴代、小林尚明、星 順隆

要約：小児急性白血病の晩期障害を心理検査の面から検討した。治療開始後3年以上生存の28例について、WISC-R、B-Gテスト、矢田部ギルフォード、PFスタディ、児童性格検査、親子関係を検討した。患児は知能検査で表現力に乏しく、動作も緩慢で、要領の悪さが目立った。性格は自己主張が少なく、消極的、自主性の未熟をみとめた。親子関係では、両親に溺愛、盲従、沈静さを欠く傾向を初期にみとめたが、年月の経過と共に改善された。

見出し語：急性白血病、晩期障害、IQ、心理検査、面接検査、

1. はじめに

集学的治療の進歩により、小児白血病の治療成績の向上は目覚しいが、一方、長期生存者の quality of life が問題になってきている。今回、当科で治療した急性白血病人の心理検査からみた晩期障害を検討したので報告する。

2. 研究対象

最近10年間に当教室で経験した、急性白血病の治療開始後3年以上の生存例28名を対象とし、治療開始からの経過年数と心理的後遺症との関係を見るため以下のA、Bの2群に別けて検討した。治療開始後3年から5年未満をA群とした。すな

わち、A群は男子8名、女子2名、計10名を含み、発症年齢は、2歳1カ月から14歳、完全緩解期間は3年から4年10カ月、治療中止例は3例であった。B群は、治療開始後5年以上で、男子7名、女子11名、計18名で発症年齢は1歳7カ月から13歳7カ月、完全緩解期間は5年から12年6カ月、治療中止は14名であった。

3. 研究方法

患児及び親に対し、心理検査、面接を行ない、学習障害の有無、社会性の適応、親子関係を調べた。なお、検査方法としては、知能検査(WISC-R)、ペンダーゲシュタルト検査(視知覚認知

東京慈恵会医科大学小児科教室 (DEPARTMENT OF PEDIATRICS, THE JIKEI UNIVERSITY SCHOOL OF MEDICINE, TOKYO)

能力)、矢田部ギルフォード検査(Y-G)、P-Fスタディー検査(絵画欲求不満)、高木式幼児、児童性格検査、親子関係検査、親用CMI検査を施行した。

4. 結果

知能検査では、total IQとしては、中の下から下位が多く目立ち、言語性IQは、正常分布に示され、動作性IQは、分散が大でかつIQの低値が著明であった。特にB群に低い患児がみられた。急性白血病児のIQと同じ慢性経過をたどるほぼ同年令の慢性腎炎患児のIQと比較すると明らかに急性白血病患児のIQは、後者に比べ低値を示し、これは、単なる病態の慢性化以外の要因が関与していることを示唆する。IQと治療との関係では、IQ80以下と80以上に分け、白血病の治療法並び中枢神経機能検査所見とを比較した。両群の急性白血病としてのリスク別分類、緩解期間、導入方式、中枢神経予防方法は、大差はなかったが、IQ80以下の患児は、発症、すなわち治療開始年令も若く、かつ低年令にもかかわらず24GYの放射線照射を受けていた。

B群中の5年以上の生存児について、知能検査を3回施行し、年次的推移を検討すると4年間で軽度向上している例が3名、ほぼ同数値が3名、下降例が5名あった。

今回、両群の性格をY-G検査、P-Fスタディー検査を行ない調査し、B群では、年次的推移も調べた。Y-G検査では、A群はA型(平凡型)、C型(情緒安定消極型)が目立ち、B群の患児の年次的推移では、E型(情緒不安定消極型)が目立っていたが、62年では減少し、C型(情緒安定

消極型)傾向に変化した。P-Fスタディー検査では、A群は、外罰傾向にあり、B群は、内罰傾向であった。B群の患児の年次的推移では、3回施行した結果、やはり内罰傾向が目立ち、消極的な性格がうかがわれた。

高木式性格検査で、B群患児の年次的推移をみると、58年にみられた顕示性、神経質さは、現在では、かなり安定を認めているが、面接場面では、対人関係の中で不安をもちやすい様子がうかがわれた。

親子関係検査では、両親の拒否、服従、過保護な態度が目立っていたが、現在では、患児と良好な接触ができるよう改善されていた。

5. 考察及び総括

患児については、知能検査場面において、表現力に乏しく、また、動作も緩慢であり、要領の悪さが目立った。その結果、低く評価された例もあった。患児の性格は、全般的に自己主張が少なく、消極的な態度であり、自我・自主性の未熟さが目立つが、中には、長期観察で、自立してきている例もみられた。一方、親子関係では、発症時両親は、溺愛、盲従になり、冷静に子供をみつめる事の出来ない状態から、病状の安定化と共に、良好な関係にまで変わってくる例が多く、しかし、いまだに再発に対する不安がつきまとっている事も面接を通しうかがわれた。今後の課題としては、長期生存児にみられる中枢神経系への晩期障害を極力減らすための治療法のいっそうの工夫と共に患児や両親の心理的不安に対応するトータルケアの重要性を痛感した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児急性白血病の晩期障害を心理検査の面から検討した。治療開始後3年以上生存の28例について、WISC-R、B-Gテスト、矢田部ギルフォード、PFスタディ、児童性格検査、親子関係を検討した。患児は知能検査で表現力に乏しく、動作も緩慢で、要領の悪さが目立った。性格は自己主張が少なく、消極的、自主性の未熟をみとめた。親子関係では、両親に溺愛、盲従、沈静さを欠く傾向を初期にみとめたが、年月の経過と共に改善された。